



「民間連携」で協力隊に参加 得たものを現在の仕事に還元する

中川 純一さん 市岡製菓株式会社 営業開発部営業企画課課長
Junichi Nakagawa

JICAと民間企業が力を合わせ、グローバル人材を育てるため協力隊に派遣する「民間連携」制度。
この「民間連携」制度を活用し、ベトナムの陶磁器の村で協力隊として活動した。
知らない場所で、慣れない言葉で、一人奮闘した経験は、自分にも会社にも有益なものになった。

社内の「民間連携」制度を活用し 協力隊に参加

中川さんは、北海道にキャンパスがある大学で、食品成分を分析する勉強をした。卒業後は関東で就職しようと考えていたが、東日本大震災が起これ、一時的に徳島に帰郷。それがきっかけで地元に戻ろうと決心し、市岡製菓株式会社に入社した。

「それまでボランティアを意識したことはなかったのですが、海外に出てみたいという漠然とした思いがありました。ゆくゆくは、海外勤務や海外での工場に携わりたい、と思っていました。それで、青年海外協力隊に参加しませんか、と

いう募集を社内で見えた時、チャレンジしてみようと思ったんです」

将来は自社製品を世界へ、と10年ほど前から考えていた市岡製菓は「民間連携」制度※を活用、社員に募集をかけたところ中川さんが応募し、派遣されることとなったのだ。

ベトナムの陶磁器の村で 販売促進のため奔走

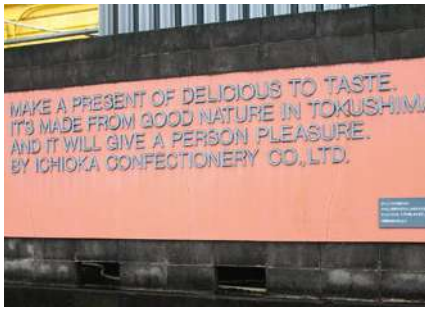
2017年、中川さんはベトナムのキムラン村に派遣された。職種はマーケティング。観光振興を目的に、民芸品の質の向上や販売促進を図ることが任務だ。「会社ではお菓子に関連する仕事をして

いましたが、キムラン村の名産品は陶磁器と、ジャンルがまったく違う。自分のできることは何だろうと考えた末、これまで経験してきた営業や販売促進の手助けをしようと思いました」

通常の協力隊の任期は2年だが、「民間連携」で参加した中川さんは1年間。短い任期での挑戦が始まった。



※JICAでは2012年から、協力隊などの派遣に「民間連携」を導入している。海外進出を考えている民間企業のニーズに合わせて、派遣国や職種などをカスタマイズして、社員を派遣する制度。



市岡製菓株式会社の看板。外国からの観光客に向けて、お店には英語の表記も。



地元徳島の農産物を使用した商品や、日本らしさを取り入れたベトナム向けの商品の数々。



多岐にわたる業務の中で、事務作業にも手を抜かない中川さん。

「川を挟んで隣り合うバッチャン村は、昔から国際的にも有名な陶磁器の産地。それなのに、対岸のキムラン村の陶磁器は、ハノイでもまったく知られていない。右も左もわからないまま、2つの村の焼き物がどう違うのか、製造元から販売先まで自分の足で調査しました」

販売促進を進める商品として、ホテルで装飾に使う花瓶に的を絞った時には、すでに任期の半分が過ぎていた。

「ホテルを一軒一軒訪ねて、アンケート用紙を配ってまわりました。メールや手紙ではなく、自分で動いたほうが回収率が高いんです。結果的には発注も出るようになりました」

課題や改善案を配属先に提出した時点で、中川さんの任期は終了。製品の広報は陶芸協会が行うことになった。共に仕事した人たちとは今も連絡を取り合い、ホームページが完成したら日本語版も作りたいと話合っている。

「知らない場所で、これまで扱ったこともない陶磁器の販路を、ゼロから一人でベトナム語を通して開拓できるようになったことは、本当にいい経験になりました。環境が違う中で、すべて自分で

考えて行動することを学んだのです」

「民間連携」で派遣された社員は、グローバルな視野や語学力を培い、現地でのさまざまなニーズを把握し、ネットワークを作る。そうして得たものを、復職後に企業へ還元することが期待される。

営業も協力隊も 相手の立場に立って考える

「地元徳島の農産物を買って加工し、全国に販売する“地産地消”の考え方で、製品を作っています。中小企業として、このような地元に貢献している取組みが評価され、表彰状も多くいただいています」

中川さんが協力隊で活動していた2018年には、子会社「市岡製菓ベトナム」と工場が立ち上がった。どら焼き、たい焼き、わらび餅のような日本らしい商品を Made By Japan として製造し、一部商品はカスタードやチョコレートなど、ベトナム人の嗜好に合う味も開発。コンビニと共同開発したどら焼きは、ベトナム人にも人気なドラえもんのパッケージで販売されており、売れ筋商品

中川 純一さん プロフィール

徳島県出身。大学で食品科学を学ぶ。2012年、市岡製菓株式会社に入社。2017年から2018年まで、JICAの「民間連携」制度により青年海外協力隊に参加、ベトナムで活動する。現在は営業開発部営業企画課長。

となっている。

また、徳島県名産のサツマイモ「鳴門金時」の栽培がベトナムでJICAの案件になったと知り、ゆくゆくは現地で採れた「鳴門金時」を使ったお菓子をベトナムでも……等々、アイディアは尽きない。

「営業で大切なことは、お客様の立場に立って考えるということ。協力隊も現地の人たちの立場に立つことが大切だと思います。営業も協力隊も、根本は同じだと感じています」

協力隊から帰国して2週間目には、もうベトナムへの出張があった。今は月1回のペースでベトナムに出張している。「会社にとっても、自分の経験がダイレクトに仕事に繋がっていると実感しています。このままの勢いで、仕事を続けていきたいですね」

中川さんへの エール!

市岡製菓株式会社
代表取締役社長
市岡 沙織さん



前向きにチャレンジするリーダーとして期待しています

営業と工場のコミュニケーションをとり、穏やかに人と人を繋げられる人。民間連携の募集をかけたときに、関心がある社員は大勢いたものの、実際に行ってくれたのは中川君でした。その一歩の違いは大きい。帰国後は、思ったことをはっきり発言し、積極的で、仕事のとらえ方も大きく変わってきました。他人の意見も尊重し、海外事業はトップに立って進めています。これからも前向きにチャレンジして、リーダーになってほしいと思っています。